せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第九十二号（毎月一日発行）
平成九年五月一日

北海の鰊場 古平風土物語

定期船で九死に一生

高橋源五口

ものすごい怒濤が定期船の舷側を打ち、しぶきはデッキをごうごうと洗い、船室にまで波が飛び込んでくるし、荷物が船室の中を転がる始末であった。

中にいた八、九人の乗客は、男も女ももう吐き出すものもなくなり、ついには胃から黄色の水まで吐き出し苦しんでいる。この時乗り合わせた一団の五人のおっかさんたちは、石狩の"生振観音"詣での帰りだと言ってたが、顔色はすっかり青ざめてもう疲れ果てていた。（この一団の中に、沖町の八反田さんの母さんもいたように思う）この人たちは、苦しみながらも「ナムカンノンサマ」「ナンマイダブツ」「ナンミョウホウレンゲキョウ」などと、うめき声をあげるように神仏にすがるばかりであった。

ずぶぬれの寒さと怖さで、私も「はやこれまでか――」と観念したのであった。

やっとのことで"青鬼の牙"を逃れて、湯内（今の豊浜町）沖を過ぎた。この苦しみのなかをまた一時間、ようやくのことで沖村（沖町）を過ぎて、山中の二番目のトンネルを過ぎ、沢江に近づいた頃からやっと波は少し衰えたようであった。丸山岬が強風をさえぎっているのである。

「ナム丸山観音様」おかげで四時間がかりの難航で、やっと時化地獄から解放されて、新地の澗に着くことができたのであった。

しかし、ここでも陸に上がるまでが大変であった。強風のため、本船から艀（はしけ）に乗り移るのが難しく、当時、能登回漕店・保木回漕店などがあったが、そこの若い人たちが苦労しながら、一時間ほどもかかって全員がどうやら上陸することができたのであった。

こうして私たちは長時間、世にいう生死の境をさまよったのである。

陸に上がった乗客の顔にやっと安堵の色が浮かび、かすかに喜びの声が出るようになった。みんなは暗くなった浜で、ふらふらしながらも石を踏みしめ歩き出した。

船酔いはかなりひどかったようで、回復するまで相当かかったように思う。

この大時化でふだんの四倍も時間がかかる難航であったが、これは針（気圧計）の見方が甘かったのがその原因であったという。

アイヌの［ことわざ 世間ばなし集］から

▼シャラカムイのこと

アイヌの人たちが口論になり打ち合いを始める時には、両方からメノコを出し口論の趣意を述べてから、それから打ち合いを始める。ただし刃物や弓矢は使わずキチ（槌＝つち）を使う。もっともこのようなことにならないように、運上屋支配人などがその中に入り仲直りをさせるが、双方が納得しない時にはこのシャラカムイが始まる。そして人数が少ない時には隣村から助勢を頼むこともあるという。これより争いが激しい時にはドミといって、刃物、毒矢などを使うことがあるという。

―百年の歴史を閉じる―

稲倉石鉱山〈13〉

■初代所長石川利雄が叙勲

昭和四十二年十月、鉄興社監査役・石川利雄が、稲倉石鉱山の開発とマンガン業界に貢献したという功績で、内閣総理大臣から藍綬褒賞を受け、伝達式ののち、皇居において天皇陛下に拝謁の栄に浴した。

■稲倉石の表玄関も

今では通用門に

国道229号線・海岸道路が開通するまでは、一日一便か二便の定期船が唯一の交通機関で、昭和九年に新しく出来たこの港町事務所には、稲倉石へ行く人たちはみんな寄って行き、定期船に乗る人はここで時間待ちをしていて、さながら稲倉石の表玄関のようであったが、交通が便利になるにしたがって通用門のような存在になり、鉱石の輸送、貨物の受理や発送がその主な役割になった。

最盛期の昭和三十八年当時、所員は一人で、臨時ハシケ人夫五人、本船荷役は三隻のハシケと引き船を使う沖積み荷役で、鉱石は大部分が秋田の酒田港揚げであった。荷役作業はすべて請け負いであったが、ここ二、三年の減産から稼動日数が少なく、したがって作業員も老齢者や未成年者が多く保安には特に留意していた。

■貯鉱舎からの

鉱石の荷役作業

作業は通常午前六時から午後六時までで、一日五百トンから六百トンの積み込み能力があった。春から秋まではほとんどスライム（泥状の鉱石）の積み込みなので、雨を一番心配した。冬の日本海は天候が急変しやすく、寒風の中で、足もとの氷を気にしながらの沖作業は危険でもあり、大変な苦労があった。

古平の人は、「鉱石積みが入った。またシケだネ」と言う。船はなぎに航海し、時化に入港するのでそうなることがある。

貯鉱舎は次第に拡張されて約四千トンの貯蔵能力があるが、常時千トンから千五百トンを貯蔵していた。銘柄別に貯鉱舎に入れられた鉱石は、積込所までベルトコンベア（一時間に百二十トンの運搬能力）で運ばれ、ハシケの甲板に置かれた二メートル角のもっこに入れる。一隻平均三十トンほどが積まれ、本船までの二百メートルから五百メートル（停泊しているところは水深六メートル）を引き船（五トン・ディーゼルエンジン三十馬力）に引かれて行き、鉱石の入ったもっこは本船のウィンチで巻き上げる。七百トンくらいの運搬船だと、二十五人の作業員で十三時間から十五時間で積み込みを終えた。

■鉱石運搬船

昭和四十年当時の運搬船は、日本郵船㈱との契約による興福丸（七百トン）と正英丸（九百トン）が交互に、月に六船程度が入港していた。昭和四十二年になり、運搬船は正福汽船㈱との契約に替わり、興福丸、正開丸、昭隆丸（千五百トン）の三隻が輸送に当たった。これらの汽船の乗組員は十二人から二十人くらいであった。

■荷役の請負業者

戦時中は会社の直営だったが、昭和二十五年から四十年までは大和工業所（田仲国松）それ以後は磯谷組（磯谷栄）、桐沢秀二、大同建設㈱（高橋美喜雄）が昭和五十年まで、五十一年から五十九年までは巴組（中村義人）が人夫の供給だけをしていた。

■運搬船があわや遭難

昭和三十五年五月三十日の午前六時ころ、昭和海運㈱所属の興福丸が古平港からマンガン鉱石を積んで航行中、荷崩れのため船体が傾き、危険を感じて入舸港外に避難したが、刻々と危険の度合いが増し、転覆のおそれもあるため救助を求めてきた。

入舸消防団は日司方面からの応援を得て、船体の復元作業に懸命の努力をしたため、船は危うく難を逃れて平常に復し古平港に引き返すことができ、船はその後再び出港したのである。この団員の美挙は、会社はもちろん、船長をはじめ乗組員一同から非常に感謝された。

（積丹町広報・昭和35・7・1）

遥かなる故郷の思い出
子どもの頃の夢を実現!?

〔32〕

橘　義春

―第三話―
砂金の話

小学校高等科二年のときの担任は、熱血先生で生徒に人気のあった山田保章先生だった。

山田先生の得意な教科は理科で、鉱石の勉強の時はいろいろな鉱石の標本を持って来られて、特徴から名前まで詳しく教えていただいた。その中で、大きくてひときわ目立つ黄銅鉱は金色でキラキラと輝いていた。

以前から疑問に思っていたことがある。それは、新地分教場の裏の切り通しの自動車道路のそばに、青ねん土の採れるところがあるが、そのねん土の中にやはりキラキラ輝く金色の粒が入っている。少年雑誌でアメリカの砂金採りの記事を読んだことがあり、もしかしたらあれは砂金でねぇべか？　と思ったりしていたので、早速その日の昼休みに、職員室の山田先生のところへ行ってみた。

「先生、新地の分教場の裏の切り通しで採れる青ねん土の中に、金色の粒が入ってるども砂金でねェべか。先生どんだべ」

「古平はマンガン鉱石の採れる鉱山はあるが、砂金は採れねェベサ。そったら話聞いだごどねぇど」

「すたども先生、すぐそばにチャッコイ（小さい）川が流れでるから、ねん土といっしょに山から砂金が流れで来たんでねェべが」

「おれは砂金でねェと思うけどなァ。おめェはどうだ」

「さっき先生が見せてけだ黄銅鉱より金色がうんときれいだったょ。ねん土の中にマッチ棒の頭ぐらいの粒々がいっぺい入ってるょ。おれ砂金のような気がしてなんねェ。どんだべ先生、あれが砂金だったらたいしたゼンコになるベサ」

「アッハハハ――、橘、それが砂金だったらの話でナ。そしたらナ、その粒の大きそうなヤツを水で洗って泥を落としたら、石の上にのせてかなづちで叩いてみれ。それがばらばらになったら黄銅鉱、もし砂金だったらペッタンコにつぶれるから、それではっきりするベサ」

先生から金の鑑定法を教わったが、先生も青ねん土の中の金色をした粒の話には大分興味を持ったみたいで、今度、その青ねん土をスコップで採って持って来て見せてくれ、と言われた。ちょうど冬だったので青ねん土を採取することができないでいるうちに、卒業式になってしまい、先生との約束を果たさないで、心残りはあったがそのまま東京に出てしまった。

昨年、お盆で実家に帰ったときに弟から、昔の分教場のところで温泉を掘っているという話を聞いたので、それを見に行ったときに、切り通しの青ねん土と砂金のことを思い出した。場所は確かこの辺りだと思って探してみたが、昔と地形も変わっていて分からなかった。

あれからもう六十年も経った今、砂金にとりつかれた？　ひとりの教え子が現場付近をウロウロしているのを見て、泉下の山田先生は苦笑いをしているかも知れない。

近い内に、またお盆にでも帰省したら小学校の同級生でも誘って、砂金掘りにでも挑戦してみるか。もしかして、ピッカピカの砂金でも出てきたらどうすべェ。とたんにゴールドラッシュになるベサ。

だから古平は夢があって、不思議なところだ。

数十年来の私の宝物

渡辺ハツエ

つい十数日前までは雪かき、排雪と心地よい汗を流していたのにその作業にもしっかり解放されてしまって、ただのんびりと運動不足の毎日を過ごしております。土が出てきて、菜園での農作業を始める時期が近づいてきました。とはいっても、たかが知れている猫の額ほどの家庭菜園ですから、猫とカラスに逆らわれながらも、毎年くり返している私の営みです。秋の収穫時には子供たちのところへ送って、喜んでもらうのを楽しみにしてがんばっています。

農作業に取りかかるまでのひまな時期、私が、いつも気にかけている身の回りの整理をしておこうと思って、まず最初に子供たち三人の、小学生のころの成績表などを入れてる箱を開けてみました。中は図画、習字、作文、絵日記、それにテストなどで、決して立派な成績ではありませんが、子供たちそれぞれの学業の証として大切に保管しておいたものです。

何十年も経っている箱は色もあせて汚れてはいますが、これらは、子供たちが私に残して巣立って行った、私にとっては大切な宝物なのです。

今、その作文を読んでみますと、親に対する子供の心情のあふれるものがあって、涙で途中から読めなくなってしまいました。また、新しい箱に入れ替えて大切に保管しておきたいと思っています。

そんな中で、私の生活環境が一変しました。今日まで暮らしてきた自由気ままな生活の維持が不可能になりました。私の宝物も無用の長物になってしまうのです。

夏には子供たちが帰省します。この箱を見たら何と言うでしょう。その反応も楽しみにしております。

川柳

ふるびら温泉《一望館》を詠む・三句

渡辺ハツエ

古里は心の憂さの捨てどころ

猫カラス生きる権利で荒らす畑

浜不漁カラスの縄張りゴメ荒らす

北政道

なごやかに会話もはずむ一望館

町外の人ともなごむ一望館

子の招き行くまい決意ゆるがせる

無料券寿命も伸ばす一望館

日の丸と君が代が好き戦中派

あとがき

「楽しみにしています」という声を励みに、夜なべにワープロを打っていますが、毎月、七百五十部印刷しています。個別に配布することもできませんので、次の所でご利用ください。役場・郵便局（古平・浜町）文化会館・ふるびら温泉・福祉センター、その他

今月は、急ぐ仕事があってすっかり遅れてしまいました。お詫びしておきます。

一家でスケソの縄繰り

竹内コト

昭和になり、それまでは毎年のようにきまって大群で寄ってきた鰊が獲れなくなり、昭和三年は古平始まって以来という大凶漁でした。百か統近い建網がありましたが、全くといっていいほど鰊は獲れませんでした。その後も今までのような漁がなく、新しくすけそ漁を始める人が出てきました。昭和八年に船入澗が出来てからは急に盛んになって、すけそ漁が古平を代表する漁業になりました。

すけそ漁は、当時は延縄(はえなわ)による釣りでしたから、その後の縄繰(くり)りという仕事がありました。

海から引き揚げた延縄は糸がからんでいるので、それをざるのふちにきれいにならべて、餌をつけやすくしておきます。曲がった針は直し、針がとれているところには針をつけます。

冬の内職としてちょうどよかったし、私の家では子どももたくさんいたので、ストーブを囲んで、みんなが競うようにして一生懸命やったものです。

兄たちは父や母に手伝い、すけそ船が港に入るころを見計らって船着場へ行き、延縄のざるを背負い馬にくくりつけて運んで来ます。縄繰りをする人が多い時は、話をしてたりぼんやりしてると縄があたらないこともあるそうです。時化の前日は、なるべく多くもらって来ておきます。毎日休みなく仕事をするためです。わずかなお金なのですが、それでお正月用品を買ったりお年玉にしたりして、それも今では懐かしい思い出です。昔は家族みんなが働いて、それぞれ支え合って生きていたようです。私も小さかったのですが、姉たちの仕事をなにかと手伝いました。

きれいにでき上がった縄は、陸廻(おかまわ)りの男の人がいて取りに来ます。昭和十年ころの縄繰りの料金はざる一枚で三銭くらい、からまっていて手間のかかるのは少し割り増しになります。

薄暗い電灯の下ですき間風の入る冬の夜、それでもラジオを聞きながら縄くりをするようになったのは、戦後も大分たった二十年の末ころだったように思います。

古平の地名《7》

♣古平に住んでいたアイヌの人たち

今から二百十五年前というと、古平を開いた岡田家が港町の山腹に、今の厳島神社（当時は恵比須神社）を建ててからちょうど三十年後のことで、その頃の記録によると「古平には運上家一軒、番屋二軒、鯡小屋三十四軒、アイヌ小屋六十六軒、通計百三軒の漁場」と書いてある。

現在の「古平」という地名のもとになる名前をつけたアイヌの人たちは、いったい古平のどの辺りに住んでいたのだろうか。

♣古平のアイヌの遺跡調査

昭和三十年代に東京の大学から遺跡調査に来て、恵比須神社境内の一部を調べたことがあるが、その時は、「遺跡が相当土木工事で荒らされていて、資料としての価値がない」ということであった。

また、子供たちや畑仕事をしていた人が土器の破片や石器を拾うことがあるが、その量も多くはない。大正時代からの記録を見ると、

大正七年	十六戸	三十五人
同　八年	十五戸	三十四人
同　九年	三戸	十二人
昭和二年	二戸	十五人
同　五年	記録なし	

大正八年から翌九年にかけて、どうしてか急激に人数が減少している。また住んでいたのも沢江村となっているが、古平川沿いの沢に多く住んでいたようである

古平ホトトギス会

若布刈り八十五歳の鎌さばき　斉藤波留
干鰈叩いて食べる四月かな　仲谷比呂子
生憎の小雨に垂れし鯉のぼり　仲谷安代
駐車場自動車掘り出す程の雪　山口浪
花賞でる心のゆとり今はなく　越野敏雄
病む身にも花見る窓のあるわあるトンネルを抜け新緑の郷に入る　越野スミ子
柳絮とぶ浜石狩の見える丘　仲谷美砂
春風の軒端に踊る干鰈　水見句丈
融雪の溜まりにすずめ水をあび　大和田絵伊
踏青のゆけども尽きぬ牧場かな　長谷川和子
鮭朔る古平橋の賑やかに　越野清治
遠浅の河口波立つ雪解川　大島喜恵
囀りや町長選挙たけなわに　福井久美子
　　福井幸平

早朝元気のよい売り声
いさばやさん

福井幸平

浜育ちでありながら、毎日聞いたいさばやさんの誰々おばあちゃんの声がなつかしく思い出されます。

さて、いさばやとはどんな文字か調べて見たら、左様なことで驚きました。

いさば即ち五十集と書く。そして説明に、

① 江戸時代の魚市場、漁場など
② 魚問屋、魚の仲買人、魚商人など
③ 魚干物、塩物などの水産物

ついでに、いさばあきんど＝これらを取り扱う商人。いさば船＝五十集船、磯場船、いさばものを運ぶ船の意。

以下略しますが、お陰で勉強させてもらいました。

紋（紋付）を描く商売、今の中中村さんの向かい隣に宮本紋屋さんがありました。

合羽屋、これも新地町では今の長谷川さん、浜町では坂下さんの家を合羽屋さんと呼んでいて、坂下さんのおじいちゃんは、ほかに番傘（蛇の目傘など）に亜麻仁油など塗ってた仕事ぶりを見たことがあり、磯釣りも好きで浜でよく見かけたものです。

また、役場の横に仏師屋（樽見さん）があったことも記憶に残しておきたい。仏壇の塗り替えとか仏具諸々の修繕などしておりました。どこで修業されたのか古平訛でなく、いかにも職人らしい言葉づかいで、ほかに高級な下駄のうるし塗りをしてたようです。

今ではまったく消えた葬儀花屋さん、生花の葬花などなかったので結構な商売だったのかも知れません。

ヤマの灯は消えても

― 四季の生活と思い出の人たち ―

高橋藤藏
（元・稲倉石鉱業所勤務）

「越中富山の薬売り」で有名な富山市の北部地区に、古平町にかかわりのある方が定住しております。

鉄興社稲倉石鉱山で働いていた古平町の出身者二人、道内出身者二人、本州から稲倉石への転勤者の五人です。（このほかこの地で故人になられた方が二人おります）

ここには以前、鉄興社の富山工場がありましたが、稲倉石鉱山が不況で売山になろうという時、会社の事情から止むなく転勤して来た人たちです。

それからもう三十年以上も経ちましたので今は定年となり、白髪まじりのすっかり富山っ子になったつもりでも、言葉のはしはしに残る古平なまりが故郷をしのばせています。

かつては、古平町での大型民間企業としてその存在を誇った稲倉石鉱山も、炭鉱と同じように掘り出せばいつかは必ず廃山になるという宿命に抗し切れず、涙をのんでの売山、そして廃山となってしまいました。

社員は新たな職を求めて各地に散り、山間にそびえていた選鉱場や、山肌に寄り添うように建っていた社宅街が跡形もなく撤去され、今は深い雑草に覆われた荒野となってしまったのです。

以来、時の流れとともに稲倉石を知る者も語る者も少なくなり、世間の目から忘れ去られようとしています。その稲倉石を今一度思い起こそうと、稲倉石鉱山で働いていた東京・石巻・富山の有志が相寄り、鉱山の歴史・生い立ち・歩み・思い出・記録をつづった『稲倉石鉱山（ヤマ）に生きて』と題する会員誌を編さんし、全国に散在している三百五十余名の会員に配布しました。それを機会に五人の会員が集まり、一献を交わしながら、遠く古平の思い出を語り合い旧交をあたためました。

富山に移住した時は三十歳前後の働き盛りだった道産子、今は白髪まじりの好々爺もどきとなりましたが、みなさん元気そのものです。

子供のころ歌棄の浜で泳ぎ、デロレン（クラゲのこと）に刺されて二日も熱でうなされたとか、丸山の岬で潜ったら潮に流されたとか、果ては島武意の岩場でアワビをわんさと採ったことなどを生き生きと白状し、山菜採りでは自分だけが知っているワラビ・ゼンマイ・キノコなどが群生している隠れ沢があったことなど、目を輝かせて話をしていました。

また、稲倉石鉱山での危険と背中合わせの仕事はつらかったが、工場などでは見られない命をもかけた助け合いがあったし、家庭に帰っても誰彼の別なく親戚以上の深い関係と思いやりがあり、隣の声が聞こえる鉱山長屋はまさに全山一家そのものでした。

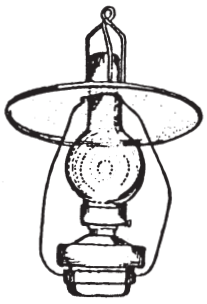
社員と関係の組夫以外で住んでいたのは学校の先生、郵便局員、酒屋さん（逢見商店）、床屋さんだけで、あとは右を見ても左を見ても鉱山の社員かその家族でした。

稲倉石は正式には古平町大字沢江村番外地ですが、市街地から十三キロも離れた山奥にあって、古平町の一地域というよりも「稲倉石村」という印象が強かったのです。

私たち五人の話題は、やぶ長のひげ爺さん、セタカムイ、ろーそく岩から始まり、山神を祀った二坪足らずの小さな神社のお祭り、山には不似合いなビリヤード場、札幌医大から医師が派遣されていた診療所、二十人そこそこの保育園、住人六百人余りの食菜をあずかる生活協同組合、消防訓練、住民運動会、大雪崩、社宅を襲った鉄砲水の大災害などなど――、次から次へと尽きることなく続くのでした。

⇦（次ページ、下段へ続く）

古平の方言（4）

・おおきに＝どうも、たいへん、ありがとう
「おおきに おおきに――」
・おおぶるまい＝大盤振舞（おおばんぶるまい）、無理してもてなす
「あそこの嫁どり おおぶるまいだって」
・おおまぐらい＝大食い、（食べ方が）いやしい
・おがっちゃ＝お母さん、中年以上の女の人
・おがる＝大きくなる、成長する
「しばらぐ見ね間におがったなぁ」
・おごっこ＝漬物
・おごらえ（れ）る＝叱られる
・おごわ＝赤飯
・おせる＝教える、知らせる
「おめェにだけこっそりおせでやる」
・おぞい＝もたもたしている、一人前でない
「おぞくて相手にならねェ」
・おっかねェ＝怖い、恐ろしい、危ない
・おっちゃ＝お父さん、中年以上の男の人
・おっちょご(こ)ちょい＝あわて者、軽はずみ
・おっぱ、おっぽ＝しっぽ、尾
・おど、おどっちゃ＝おやじ、老年の男の人
・おどごじゃっぱ＝男まさり、きかない女
「おのおなご、おどごじゃっぱだどォ」
・おぶさる＝背負ってもらう、面倒をみてもらう
・おぼこ＝うぶな娘、赤ん坊、少女
・おまはん＝お前さん、あなた
・おやかた、おやがだ＝親方、主人、経営者
・おらァ＝おれ、自分
・おりぐぜん＝仏前に供えるお膳
・おんじ、おんちゃ＝弟
・がいだが＝（大きい）毛虫
・がおる、がおった＝（大変）疲れる、疲れた
・かきだし、かぎだし＝請求書
「（鰊場で）だし（出し風＝沖に向かって吹く風）はおっかねぇが、店のかぎだしなおおっかねェ）という歌の文句もあります。
・かくまき、かぐまき（角巻）＝女性用の四角い毛布のような防寒具
・かっつく＝追いつく、勝った
「運動会であいつにかっついだど」
・がっぱすけ、がっぽり＝非常に沢山、どっさり
・かっぱらう＝盗む、・がさえび＝しゃこ
・かしがる＝傾く、（商売で）家が傾く
・ガス（がかかった）＝霧（がかかった）
・かだせる＝仲間に入れてやる
「おめェも、かだせでやる」
・かちゃまがす＝かき回す、話をこわす
「あいつに、かちゃまがされてしまった」
・かちやぺねェ＝ひ弱な、頼りない
「あいつは、かちゃぺねェやづだ」
・がっちゃき＝痔の病気
・かっちゃぐ＝引っ掻く、つめをたてる
・がめる＝欲ばる、ごまかす、盗む、無理する

（前ページ下段より続き）
故郷っていいもんです。
齢を重ねるといっそう郷愁がつのります。決して忘れることはありません。
五人はこれからも親交を深め、古平の海、稲倉石の山々を思い浮かべ語り合いたいと思っております。
〈追　伸〉
古平町史編さん室の村井芳男さんと、元稲倉石鉱山の社員高橋健一さんがお送り下さいました、ミニコミ誌『せたかむい』を五人で回覧しております。
懐かしい地名、お名前、記事が載っており、むさぼるように読ませていただいております。
ほんとうにありがとうございました。
（現住所・富山市城川原一丁目九番四十九号）